

愛さずにはいられない

生島治郎

自選作品集 / 三一書房

愛さずにはいられない

定価 四五〇円

一九六七年八月二十二日 第一版発行

著者 © 生島治郎 一九六七年

発行者 竹村 一

印刷所 同興印刷株式会社

製本所 有限会社佐伯製本所

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二一九

電話東京(二九)三一三一五番

振替 東京八四一六〇番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

生島 治郎
いぐしま じろう

一九三一年 上海に生まれる

一九五五年 早稲田大学英文科卒業

一九六一年 早川書房『エラリー・クイーンズ・ミステリー・マガジン』編集長

一九六八年 以後、文筆業に入る

著書『傷痕の街』(講談社)『黄土の奔流』(カッパ・ノベルス)他

一九六七年『追いつめる』(カッパ・ノベルス)第五十七回直木賞受賞

現住所 東京都新宿区内藤町一 寿苑荘二一〇

生島治郎自選作品集

愛さずにはいられない

目次

血が足りない……	5
ブルー・ムーン……	43
最後の賭け……	69
チャイナタウン・ブルース……	99
夜も昼も……	137
拳銃きちがい……	165
夜の腐臭……	183
夜の証言……	203
氷の城……	223
愛さずにはいられない……	251
あとがきにかえて……	313

血が足りない

倉庫の中はうす暗く、しめった空氣がよどんでいた。壁に沿って、埃をかぶった色とりどりのパチンコの機械が、うす高く積みあげてあり、その上に、明りとり窓がひとつ、白々しい午後光りを、むきだしコンクリートの床に投げかけている。

かすかに扉がきしみ、その間から、白と茶のコンビの靴が、すいと音もなく倉庫の中へ忍び入ってきた。靴はコンクリートの上で、居心地わるそうにしばらくじっとしていた。

入ってきたのは、白っぽいサマー・ウーステッドの三つ揃いをびたりと身につけた、長身の若い男だった。眉が太く、顔色は小麦色に陽焼けしていかにも健康そうだが、眼の色は冬の運河のように暗く冷たかった。男はそこに立ちつくしたまま、眉をひそめ、あたりへ眼を配った。ようやく、眼がなれてくると、男の唇に微笑が浮かんだ。ゆっくりと、しかし、しなやかな歩き方で部屋の隅へ行き、そこにすわっていた中年の男へ声をかけた。

「どうです、調子は？」

中年の男は答えなかった。

若い男の方をふりむきもせず、テーブルの上に載っているものをみつめている。テーブルに載っているのは、銃身が長く、妙にアンバランスな拳銃だった。

若い男はその方へ、なんとなく顎をしゃくってみせながら云った。

「サマはよくないが、けっこう役に立つって評判ですぜ」

うす暗い倉庫の中で、肉のつきすぎた中年の男の顔は、白っぽく浮いて見えた。その頬がふる

え、かすれがちの重い声がもれた。

「使ってみなくちゃ、なんとも云えねえ」

中年の男は顔をあげ、耳をすませた。顔をあげると、肉に埋もれた小さな眼がキラリと光った。若い男も耳をすませる。遠くから、かすかに、重々しい響きが伝わってきたかと思うと、それはたちまち頭上にせまった。この倉庫の上を通る高架線の電車の音だ。

倉庫が小さきぎみにゆれ、電車が頭上を通過しようとする瞬間、中年の男の、顔に似ぬたくましい腕がすばやく伸びて、拳銃をすくいとった。

電車の音と拳銃の発射音が重なり合って、コンクリートの壁をふるわせ、しめった空気が、ゆれ動いた。

中年の男は掌の拳銃を眺め、しばらく考えこみながら、二度三度、にぎり直してみる。それから、傍に立っている若い男をふりあおぎ、顎をしゃくった。

若い男はすぐ倉庫の向こう側へ行つて、そこに立てかけてあった角材の切れはしを持ってきた。六分ほどの厚みのある、その角材の真中にめりこんだ弾のあとを、入念に指先で探りながら、中年の男ははじめてかすかな笑みをもらした。

「ちょっと左にそれるくせはあるが、まあわるくないな。こんなものを、ここのチンピラはふりまわしているのか？」

「西部同志会には、この手の拳銃がまあ二十はあるそうですよ」

「なるほど、こいつを専門につくってるやつがいるんだそうだな。どんなやつだ？」

「会ってみればがっかりしますよ」若い男の頬に軽蔑しきった薄笑いが浮かんだ。「まだ青っぽい

十九のチンピラでね、西部の幹部級だと自分じゃ思ってるらしいが、それも拳銃（ハンデック）を作れるから立てられてるだけ——三下にも馬鹿（ウケ）にされる度胸のねえ男ですよ」

「名前は？」

「みんな、ケンって呼んでます。本当はなんて名だか、おれも知らない。本当の名前なんかどうでもいい、ケチな野郎でね……」

「ケチな野郎かどうかは知らないが、とんだ器用な真似をするじゃないか」
中年の男は、もう一度、拳銃を持ち変え、輪胴（リンドウ）の中をのぞいてみた。玩具（おもちゃ）の拳銃を改造したものらしく、銃身と他の部分の金属が違った光り方をしている。

「なんでも、おやじがこういう玩具の下請工場をやってたって云うんですがね、やつの家には古ぼけた機械があつて、そいつをいじくりまわしちゃ、こいつを作るのがケンの道楽なんですよ」

「おまえにやわかるまいがな」中年の男は拳銃の撃鉄をあげ、カチリと引金をしぼりながら云った。「こいつはちゃんと銃腔（ライフル）に腔綫（ライフル）がきざんである。それで射程距離が長いんだ。手製の拳銃にしちゃできすぎてるぜ。こんなものをふりまわされちゃ、とんだ迷惑だ。そのケンとか云うやつを、ここへ連れてきてもらおうか……」

若い男はうなずくと、足早に倉庫から出て行つた。

「人間ってものア　いつなんどき、どんなめに合うか知れやしねえ」

ケンは熱気がこもり脂がべとべととする布団の中で、居心地わるそうに両手を伸ばし、大きなあくびをもらすとそう呟いた。これがケンの口ぐせなのだ。この言葉を呟く時だけ、ケンはかすかに

死んだおやじを思いだす。酒好きなおやじは酔っぱらうたびに、まわらぬ舌でこればかりをくりかえしたものだ。ケンの母親が家出してからは、なおさらそのくせがひどくなった。

もっとも、おやじが心臓麻痺で道ばたにひっくりかえった時、この口ぐせをもらすひまがあったかどうかは、ケンも知らない。四年も前のことだ。昨日のことさえ、ケンは覚えている気はなかった。どうせ考えるなら、今日の楽しみのことを考えた方がいい。

「なあ、ター坊、そうじゃねえか？」

雨戸の破れから射しこんでくる明るい陽射しに眼を細め、ごろりと起き直ると、ケンは隣に寝ている男の子に声をかけた。

三歳ぐらいのその男の子は、口をぽかんとあけ、じっとケンを見つめていた。垢だらけで愛くるしいところはなく、知能の遅れがはっきりとわかる虚ろな眼をしている。

「ああ、むう、むう」

子供は呟いて、布団の端を噛んだ。

「腹が空ったのか？ 待ってなよな、今日はあんちゃんが金^ナをゴッてりもらって来てやるからな」
そう云い聞かせながら、垢だらけの子供を抱き起こす。ケンの腕に子供の体重がやわらかく伝わってきた。いい気分だと思う。なぜいい気分なのかはわからなかったが、ター坊を抱くといつもそう思うのだ。

ター坊は知能の遅れているかわりに、大人しいのがとりえだった。なにひとつケンにさからわず、されるまま、全身をケンにゆだねている。ター坊に対する時だけは、仲間たちに対する時のようなかけひきはいらない。ただ、こうして抱いてやればいいのだ。そうすれば、ター坊は安心して

いる。そして、その安心がケンの胸の内の、ガラガラしたもの、トゲトゲしいもの、不安やあせり、恐怖、欲望、すべてを甘いゆったりした気分溶かしこんでしまう。

（麻薬を打つと、こんな気分になるかなあ）とケンは時々思う。愚連隊仲間の麻薬中毒者に云わせると、麻薬を打ったときは、最高にイカした気分になり、うっとりするそうだ。ター坊を抱くことは、最高にイカしたとは思わないが、うっとりすることはたしかだ。うっとり平和な気分になる。

「おめえとこうしている方が、女なんか抱いてるより御機嫌だよな」

ケンはそう云って、ター坊の指を口にくわえた。しゃぶると甘酸っぱい味がする。ター坊は大人しくされるままになって、信頼し切った目をケンに向けた。もう一方の手でケンのあごの下をまぎゅっている。このまま食べてしまいたいような衝動が、ふいにケンの胸をつきあげた。

（ガキってやつは、どうも妙な気分させやがんな）

子供をゆすりあげながら、ケンは思った。高くゆすられて、ター坊は始めて子供らしい笑顔をみせ、キャッキャッと声をあげる。ケンは自分でもおかしいなと思うぐらい、何度もそれをくりかえした。何度も何度も。

全身汗みずくになり、腕がいたくなって、ケンはそれをやめた。ケンもター坊もぐったりして、しばらくは、ぼかんと呆けた顔を見合わせる。

「おれとおまえは、最初っから気が合ったんだものな」とケンは満足そうにつぶやいた。

ター坊をひきとったのは、ケンが十六の時だった。ひきとった——というよりは、押しつけられたといった方が当たっている。

その年の夏、ケンは愚連隊仲間といっしょに、公園の中で女子高校生を襲った。その娘は妊娠

し、親がそれに気づいた時には、もうおろすには手遅れになっていた。襲った仲間は四人だったが、両親に問いつめられると、娘は顔見知りのケンの名だけ口にだした。

女の父親が怒鳴りこんできた時は、ケンも面くらった。そんなことは、とくに忘れていたのだ。忘れていただけにかえって度を失い、怒鳴られ放題に怒鳴られた。父親はケンの垢じみた家の中や、チンピラ愚連隊そのものといったケンの様子を見ると、はっきり気持ちを固めたらしかった。警察沙汰にはしないでおくと父親は云った。そのかわり赤ん坊をひきとれ、むろん、娘を嫁にやるわけにはいかない――。

どうにでもなれ、と思い、赤ん坊を連れてきたら尻をまくってやるか、とも考えていたケンだったが、現実には、赤ん坊を連れてきた父親が十萬円の養育費を出すと、気が変わった。十萬円は、ケンにとって生まれてはじめての大金だった。ケンは泣きわめいている赤ん坊を父親から受けとった。ケンの手にうつたたとたん、赤ん坊は泣きやんだ。

「やつぱり、父子はあらそえない」

その時だけ、父親もしんみりしてそんなことを云った。その言葉のせい、ケンは抱きとった赤ん坊に、なんとなくそんな重さを感じた。翌日から、ケンとター坊は気の合った仲間になった。

ケンが赤ん坊を押しつけられたと聞いて、愚連隊仲間は大笑いだった。

「バカだなあ、おめえは。金^{ナツ}だけいだってよ、ガキは一週間もあずかったら、返しにいきやいいじゃねえか。ごたごた云やがったら、おどかして銭をとるんだよ。なんなら、おれが話^{ナツ}をつけてきてやろうか？」

仲間たちがそうすめたときは、ケンはもうター坊を離す気はなかった。

「しようがねえじゃねえか」と彼は氣弱な微笑を浮かべて云った。「いつかは、だれだってガキができるんだからよ」

それでも、十九の身空でとうちやんと呼ばれるのは氣がさすらしく、ケンはター坊に自分のことをあんちゃんと呼べと教えた。しかし、三つになっても、ター坊は片言さえ満足にしゃべらず、「ああ、むう、むう」と云うだけだった。

ケンはター坊のおむつをとり変えようと、背中に背負って、家を出た。露地を角まで出ると、真向いに駄菓子屋があり、すすけたガラス戸の向こうでやせこけた女が、ぼんやり店番をしているのが見える。

「おばさん、ター坊をたのむぜ」

ケンは手荒くガラス戸を開け、女に声をかけた。

「いいよ」女は少し斜視の眼をケンに向けた。「でも、これで三日、あずかり賃をもらってないね」

「わかつてるよ。ここんところ、仕事にかかりつきりだったから、ゼニが出るばっかしだったんだ。でも、今日はものをわたして、金をもらって来るよ」

「へえ、またピストルをつくったのかい？」

女はター坊を受けとりながら、何気なく云った。

「おい、妙なこと云いやがると、タダじゃおかねえぞ」ケンは目をむいて、女をにらみつけた。「警察にでも知れたら、危いじゃねえか……」

にらまれても、女はあまり驚かなかった。

「なに云ってんだよ。この辺の人はみんな知ってるよ。だいいち、あんたみたいなチンピラは警察も相手にしないとさ」

「ふざけやがって、へんなことばかり云いふらすより、ター坊をしっかり頼むぜ」

ケン は女の手に抱かれたター坊のうす汚れた頬つぺたをつついた。

「いいかい、あんちゃんはずぐ帰ってくるからな、おとなしく待ってなよ」

「ああ、むう、むう」とター坊は答えた。

それからすぐ自分の家へとって返すと、ケンは工作場へ入った。今にもくされ落ちそうな工具置場の隅に手をつっこみ、ぼろ布にくるんだものをとりだす。そつと大切そうにそれをひらくと、機械油と鉄の匂いが、快く鼻をくすぐった。出てきたのは、作りあげたばかりの拳銃だった。

冷たい武器の感触は、身体中をひきしめ、ケンに自分が男であることを教えてくれる。彼は輪胴を力一杯まわしてみた。それは、カラカラとリズムカルな音をたててまわった。引金と用心金の間に指を通し、くると拳銃をまわすと、腕を伸ばして空間に狙いをつけ、引金をしぼった。

「ズダーン」

と口の中で云ってみる。

ケンの頭の中で、男が一人、銃弾を腹にぶちこまれ、はじかれたように地面に転がる。

にやりと笑って、腕を下ろし、ケンは拳銃をみつめた。暗い工作場の中でそれは蒼く誇らしげに光っていた。西部劇の英雄をまねて、銃口をフツと吹いてから、内ポケットにしまいこむ。ずっし

りとした重味が、彼に猛々しい自信を与えていた。

ケンはずも草履をつっかけると勢いこんで家を出た。

どの家も鉄錆色にくすんでみえるスラム街の入り組んだ露地を抜け、盛り場にさしかかると、ケンの心はずんだ。ただ商店が並び、夜になるとネオンがともるだけで、高級なバーや喫茶店すら見えない場末の盛り場だが、十九歳のケンには、いつもここは未知の誘惑に充ちあふれているように思われた。ここを通るとき、性の欲びに似たうずきが、若々しい肉体を走りぬけるのだ。

六月にしては烈しすぎる陽射しが、通りのアスファルトをぎらぎら照らしつけ、身体から熱っぽい脂をじりじりと滲みださせる。ケンは指先で額の汗をぬぐった。

両側の商店街が白昼の娼婦のように、けばけばしく肩を寄せ合い、その間を、拡声器の音がざらついた媚態を示しながら通りすぎてゆく。すべてが荒々しく粗雑だったが、ここにはケンを酔わせるリズムがあった。そのリズムに合わせて肩をふりふりケンは歩いていった。

ふいに、拳銃が胸にかたい感触をつたえ、ケンはかすかな戦慄を覚えた。

ケンの身内に凶暴な自信が湧き起こった。

(どんな野郎だろうが、ぶっとばしてみせるぜ)

獲物を探す眼で、彼はあたりを見まわした。一人だけ気に入った獲物がいた。小柄でやせ細り、にやけきった高校生だ。そいつは、学生服の上のボタンをあげ、緑色のスカートをこれ見よがしにのぞかせている。

「おい、おめえ、どこの身内だ？」低い声でケンは訊いた。

高校生は眼を外らし、もじもじと身体を動かした。